



Title	上博楚簡『武王踐阼』簡6・簡8簡首缺字說
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 69-74
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60910">https://doi.org/10.18910/60910</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 上博楚簡『武王踐阼』簡6・簡8簡首缺字説

福田哲之

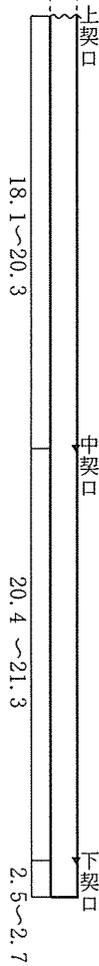
上博楚簡『武王踐阼』（以下、楚簡本）は、馬承源主編『上海博物館藏戰国楚竹書（七）』（上海古籍出版社、二〇〇八年）に収録された残存竹簡十五簡からなる竹書である。同書「釈文考釈」（陳佩芬氏担当）が、「本篇原無篇題、據其内容武王問於師尚父、師尚父告之以丹書、武王鑄銘器以自戒之事、與《大戴禮記・武王踐阼》篇相合、故名」と述べるごとく、『大戴禮記』武王踐阼篇（以下、伝世本）との間に共通性が認められ、本篇の仮称はそれにもとづく。竹簡の形制に関するデータは以下の通りである。

本篇存十五簡、竹簡設上・中・下三道編繩、契口淺斜、位於竹簡右側。簡長四十一・六至四十三・七釐米不等、各簡自上契口以上皆殘、中契口距頂端爲二十八・一至二十・三釐米、中契口與下契口間距爲二

十・四至二十一・三釐米、下契口至尾端爲二・五至二・七釐米。各簡字數二十八字至三十八字不等、總存四百九十一字、其中重文八字、單面書寫、皆書於竹黃、字體工整、字距稍寬。篇末有墨鈎、以示本文結束。

残存する十五簡の竹簡はすべて上端部分が缺失し、完簡は見られない（「囟」参照）。ただし留意すべきは、劉洪濤氏<sup>〔註1〕</sup>が指摘するごとく、上博楚簡『民之父母』（残存十四簡）<sup>〔註2〕</sup>との間に字体・形制の両面において緊密な共通性が認められ、両者はもともと同巻であったと見なされる点である。『武王踐阼』と同様、『民之父母』にも竹簡上端部分に缺失が認められ、それが両者を同巻と見る有力な根拠の一つともなっているわけであるが、幸いにも『民之父母』には完簡が一簡（簡5）残存して

【図Ⅰ】『武王踐阼』 残存簡長四十一・六〜四十三・七センチ



【図Ⅱ】『民之父母』 簡5完簡簡長四十五・八センチ



おり（【図Ⅱ】参照）、各簡の残存簡長と残赤字との関係を把握する上で一つの基準となる。

残存簡長と簡首の残赤字との関係を分析すると、残存簡長が四十三・五センチ以上の場合、簡首の第一字が残存する状況が認められるのに対し、残存簡長が四十三センチ以下の場合、簡首の第一字に欠損あるいは缺失が生じている（末尾「別表」参照）<sup>註60</sup>。したがって、『武王踐阼』残存十五簡のうち簡長が四十三センチ以下で、簡首に赤字が想定されていない簡6（四十二・三センチ）および簡8（四十一・六センチ）については、釈読に再考の余地が生ずる。

以下、私見により赤字を補入した楚簡本の本文と伝世本の本文とを併記し、個別に検討を加えてみよう。

（一）簡6簡首の赤字

……武王聞之恐懼、爲【簡5】「書」、銘於席之四端、  
 ……【簡6】〈楚簡本〉

……王聞書之言、惕若恐懼、退而爲戒書。於席之四  
 端爲銘焉、……〈伝世本〉<sup>註7</sup>

伝世本では、師尚父から丹書の言を聞いて恐懼した武王が、退出して戒書をつくり、席の四端に銘をつくる。ところが、楚簡本の原釈「武王聞之恐懼。爲銘於席之四端」<sup>(注5)</sup>では、銘をつくるのみで戒書についての記述は見えないことになる。伝世本との対応関係を踏まえれば、簡6の簡首には「書」字が存在した可能性が高く、楚簡本も基本的に伝世本と同様の記述であったと考えられる。

## (二) 簡8簡首の赤字

……鑿銘曰、見其前、必慮其後。【簡7】「盥」<sup>？</sup>盤銘曰、與其溺於淵、……【簡8】〈楚簡本〉  
……鑑之銘曰、見爾前、慮爾後。盥盤之銘曰、與其溺於人也、寧溺於淵。……〈伝世本〉<sup>(注6)</sup>

簡7末部「見其前、必慮其後」の「其前」と「其後」との対応からみて、「鑿銘」の内容は「後」字で完結したと見なされる。一方、前後の各銘の並列関係によれば「後」字の後に接続語が存在した可能性は極めて低い。これらの点を踏まえれば、簡8簡首に想定される赤字が、二字からなる器物名の第一字に該当することはほぼ疑いない。

簡8冒頭の器物名の第二字の釈読については、原釈の「從金從盤（読為「盤」）」<sup>(注7)</sup>に対して、復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会<sup>(注8)</sup>は「從金從盥（読為「盥」）」、何有祖氏<sup>(注9)</sup>は「從金從安從皿（読為「盥」）」とする。字形・音韻の両面から何氏の見解がすぐれるが、これに従えば、楚簡本と伝世本とは本文を異にすることとなり、第一字の赤字については、いくつかの候補を提示し得るものの、最終的な結論を導くことは困難となる。ただし何氏の見解については、「從金從安從皿」のうち声符にあたる「安」の字形がやや不自然である点なお疑問の余地が見いだされる。したがって、仮に当該字を「從金從盤（読為「盤」）」の譌体と解釈し得るならば、伝世本との整合性という点から、第一字に「盥」字の缺失を想定するのが妥当であろう。この点については、今後さらに慎重な検討が必要である。

## 注

(1) 劉洪濤《〈民之父母〉・〈武王踐阼〉合編》卷說「復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、二〇〇九年一月五日。

(2) 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(二)』(上海古籍出版社、二〇〇二年)所収。「釈文考釈」担当は濮茅左氏。

- (3) 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(七)』第一六二頁には、簡11の簡長は四十二・八センチとあるが、同書第三頁の竹簡全体のカラー図版によれば、簡11は簡長四十二・九センチの簡12に比べてかなり長く、簡長の記載に誤りがあることが知られる。ちなみにほぼ原寸と見なされる「積文考釈」の図版によれば、簡長は四十三・八センチと計測されることから、あるいは「四十二・八」は「四十三・八」の誤りかもしれない。いずれにしてもこれらの点から、簡11の簡長は四十三・五センチ以上である可能性が高く、上端の「武」字が簡首第一字であり、残缺字は存在しないと見てよいと考えられる。

- (4) 王聘珍『大戴礼記解詁』(中華書局、一九八三年)第一〇四—一〇五頁。

- (5) 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(七)』第一五六頁。

- (6) 王聘珍『大戴礼記解詁』第一〇五頁。

- (7) 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(七)』第一五八頁。

- (8) 復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会(劉嬌執筆)「《上博七・武王踐阼》校読」、復旦大学出土文献与古文字研究中心網站、二〇〇八年十二月三十日。

- (9) 何有祖「上博七《武王踐阼》“盟”字補釈」、武漢大学簡帛研究中心簡帛網、二〇〇九年一月二日。

「別表」上博楚簡『武王踐阼』『民之父母』の簡長と簡首残缺字との関係

上博楚簡『武王踐阼』

編號	簡長 (cm)	簡首残缺字
簡1	42.3	[武]
簡2	42.4	[在] [丹]
簡3	42.6	[目]
簡4	43.7	[阼] (左半缺)
簡5	42.4	[世]
簡6	42.3	ナシ
簡7	42.9	[所]
簡8	41.6	ナシ
簡9	42.3	[毋] [日]
簡10	42.4	[忘=]
簡11	42.8 (誤記)	ナシ
簡12	42.9	[以]
簡13	42.8	[公]
簡14	42.9	[昌] (上半缺)
簡15	43	[強] (上半缺)

上博楚簡『民之父母』

編號	簡長 (cm)	簡首殘缺字
簡1	42.5	[子]
簡2	42	[之] [父]
簡3	42.5	[之]
簡4	42.3	[所]
簡5 (元簡)	45.8	ナシ
簡6	43	[之]
簡7	43.5	ナシ
簡8	43.8	ナシ
簡9	23.4	[不] 〓 [服] 19字
簡10	23.3	[於] 〓 [口] 21字
簡11	42.5	[無]
簡12	42.3	[喪] [屯]
簡13	42.3	[志]
簡14	42	[之]

【付記1】

本稿は、武漢大学簡帛研究中心簡帛網（二〇〇九年三月二十四日）に発表した中文拙稿「《上博七・武王踐阼》簡6・簡8簡首缺字説」にもとづく。速報性を重視したインターネットの性

格上、中文版では最小限の要点のみを簡潔に述べたが、本稿では理解の便を配慮して、形制に関するデータなどを補足し図表を加えた。ただし全体の論旨に変更はない。

筆者の見解に対して、武漢大学簡帛研究中心簡帛網の「簡帛論壇」（二〇〇九年三月二十五日）に「海天遊蹤」の筆名で「討論」關於武王踐阼簡8簡首缺字」と題する論考が発表された。これは簡8簡首の二字「盟」盤の釈読について、青銅器銘文や楚簡の用例を中心にその妥当性を検証したものである。単に卑見に対する補訂にとどまらず、上博楚簡『武王踐阼』の釈読という点からも重要な意義をもつと考えられるので、以下に引用し、併せて示教に謝意を表したい。

剛才拜讀福田哲之先生大作、頗受啓發。對於《武王踐阼》簡8簡首缺字、福田先生認為「據上述內容推定、簡8簡首的缺字可以毫無疑問的設想為是有兩個字組成器血名的第一個字。……假設該字釋為『從金從盤（盤）』的譌體、從其與傳本的整合性來看、缺失的第一個字設想為『盟』會較為穩妥。」按、簡8開頭讀為「盟」盤「有可能是對的、除了今本文獻可對照外、青銅器亦有「盟盤」的文例、如《集錄》1000所載浙川下寺<sub>三</sub>「盟盤」「柶之盟盤」、又如《集成》1009<sub>9</sub>徐王義楚盤「自作盟盤」（「盟」字參李家浩先生考釋、《古研》19頁91）。所以《武王踐阼》簡8簡首首字缺「盟」是可

以的。至於第二字，與其認為是字形訛變，恐怕分析為音近讀為「盤」更為合理。該字可如何有祖先分析為從金從安從皿，顯然是從「安」得聲，元部影紐、盤、元部並紐。疊韻、聲紐看起來似遠，不過是有可能相通的。如《易·革》「君子豹變其文蔚也」、《說文·文部》「裴下引「蔚」(影)作「裴」(滂)」、《古字通假會典》頁399。又如《性自命出》31「鬱陶」之「鬱」(影紐物部)、馮勝君先生以為實為「諱」字(並紐物部)、參《郭店簡與上博簡對比研究》頁224-225、與《武王踐祚》聲韻情況正同。又如腹、《說文段注》頁215曰讀與「齷」(影鐸)同。《天星觀》·《秦家嘴》的「神臚」(影紐鐸部)即文獻的「申縛(並紐鐸部)」、參《楚地簡帛思想研究(一)》頁287。亦與《武王踐祚》情況相同。綜合以上，則該字確有可能音近讀為「盤」。

〔付記二〕

本稿は、平成二十一年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「戰國簡牘文字の地域差に関する基礎的研究」(課題番号20520386)による研究成果の一部である。